むすび塾

毎日放送と共催　@大阪・住吉区東粉浜小

南海トラフ想定 高台へ

沿岸部の津波2次避難

大阪市住吉区東粉浜地区で実施した避難訓練では、親子や要援護者、付き添いの住民ら計43人が、木造住宅密集地での地震や津波による火災発生時の避難の在り方を学んだ。

東粉浜小は南海トラフ巨大地震の津波浸水想定域に近接する市立学校。周辺は一戸建て住宅やマンションなど集合住宅が密集し、古い作りの民家も目立つ。

訓練は休日の午前10時、マグニチュード9・1の南海トラフ巨大地震が発生し、住吉区で震度6弱を記録した想定で実施。隣接する住之江区に津波が到達して火災が発生し、2次避難を迫られる設定も加えた。

東粉浜小が親子の避難訓練をするのは初めて。1年の堀尾有彩（ありさ）さん(6)方では、有彩さんと母の幸子さんが机の下に身を隠して安全を確保し、防災ずきんを着用。揺れが収まると非常用の持ち出し袋を背負い、徒歩で約150㍍離れた学校を目指した。

近所の一人暮らしの日井千賀子さん(86)方にも声を掛け、日井さんの避難を手伝う矢追勢喜子さん(71)と合流。ブロック塀の倒壊や屋根瓦の落下など、危険箇所を意識しながら、約25分で校舎に着いた。

午前10時半に参加者全員が中庭に集合したが、町会幹部はさらに約10㍍高台の住吉中に避難することを指示。校舎の裏手から中学校の敷地に登れる避難階段のゲートを解錠し、親子らは次々と階段を駆け上がって2次避難を完了した。

避難訓練に先駆けて東粉浜小では、東北大災害科学国際研究所の保田真理助手が「減災って、なあに　自分でできることをやろう」と題して防災教室を開催。児童と保護者、教員約350人が参加した。

保田氏は普段の生活で安全を確保するポイントとして①物が倒れてこない②物が落ちてこない③閉じこめられない―の3点を強調し、自宅の点検を勧めた。

家族と電話で連絡がつかない事態に備えて「災害用伝言ダイヤル（171）の体験利用サービスを試し、使い方を覚えてほしい」と呼び掛けた。

防災頭巾をかぶり、校舎に移動する東粉浜小の児童と要援護者

車いすを使った要援護者の移動にも取り組んだ

地域の特性

敷地近くに直下型断層帯

大阪府は南海トラフ巨大地震で主に津波により大阪市内で最大約12万人、府内で13万人以上の犠牲を想定。早期避難で犠牲を一方人以下にできるとして防災啓発に乗りだしている。

東粉浜小がある住吉区は内陸部だが、5000人の犠牲が想定される浸水域の。住之江区に隣接し、避難時は混乱が予想される。直下型地震を引き起こす断層帯が敷地そばにあり、揺れへの警戒も怠れない。

■むすび塾に参加して　―大阪・住吉区東粉浜小

【参加して】避難時は家から持ち出したい物もあるかもしれない。まずは命を守ることに専念しようと思った。
＝保護者・大久保麻喜さん(46)

【訓練を終えて】1人でいる時に地震が起きたら、最初から高台の住吉中に逃げようと家族で決めた。
＝東粉浜小5年・大久保芽希さん(11)

【訓練を終えて】電線が切れたらどうしようなどと考えながら避難経路を歩いた。もっと防災意識を高めたい。
＝要援護者避難サポーター・寺口やつきさん(59)

【参加して】自分たちの命を守ると同時に、他地域からの避難者をどう受け入れるかも検討したい。
＝東粉浜連合振興町会会長・播磨秀明さん(71)

【訓練を終えて】2次避難の訓練では、中学校までの急坂を上る高齢者がつらそうだった。津波でない限りは小学校にとどまるべきだ。
＝学校協議会委員・西田陽子さん(69)

訓練重ねパニック回避

東北大災害科学国際研究所助手　保田　真理さん

災害時はパニックになり、避難しようとしても普段の2～3割のワザしか出ないと考えた方がいい。それを7割にまで上げられるように訓練を重ねてほしい。

家族全員の無事を災害後に確認することは大事なことだが、お互いが離れていそうだ。周囲の様子を確認する時間帯は必ずある。待ちながら避難してほしい。

合わせ場所をあらかじめ決めておけば、連絡が取れなくなっても、無用な混乱はなくなる。

東粉浜地区は道路が広く、地震で電線やブロック塀、家屋の壁、瓦屋根といった落下物が多く発生しそうだ。周囲の様子を確認しながら避難してほしい。

■専門家から

災害弱者は臨機応変に

車いすの利用者や高齢者が避難する際は付き添いの人が健康状態に応じ、上り坂でも短距離のルートと、遠回りだが勾配の少ない道のりとを臨機応変になる。普段から経路を選択しておくと同じ顔ぶれでなぎをしておくことが大切だ。どのようなことが大切だ。どのようなことが大切だ。どのような